

## 論文

# 現代中国語“对”における機能分化について

中西 千香

## 要 旨

現代中国語の前置詞（介詞）は動詞を起源とし、虚化を経てできたものである。ただ、前置詞という品詞でくくられたその中身はさまざまで、それぞれの動詞からの機能分化の痕跡や前置詞としての機能も異なる。その中でも動詞用法から前置詞用法に至り、さらに通常の前置詞より虚化したかたちと機能を持つ、“对（对于）”を取り上げる。前置詞の現代中国語に残された痕跡をみることによって、機能分化のすがたを提示したい。

キーワード：对 動詞 前置詞 機能分化 文法的位置

## 1. はじめに

前置詞は、動詞から虚化してできたものだが、現代中国語の中でも動詞から“半動半介”からより虚な用法まで、さまざまな段階の用法がみられる。

今回とりあげる“对”もその一つである。“对”は「同一空間における対面関係」を条件とする動詞用法、方向、対象を引き出す前置詞用法、話題を引き出す前置詞用法まで、まさに“半動半介”の過程を経て、より虚な用法へ広がっている。

中西2002、同2004では、“对”の目的語や後続の動詞フレーズとの関係から機能分化をみたが、そこでは動詞フレーズを分類したにすぎず、“对”の機能分化への言及が足りなかった。本稿では先行研究をふまえ、“对”と結びつく動詞フレーズの特徴、“对”の目的語の語彙的意味、“对”の文法的位置から、前置詞の機能分化の1つのモデルを提示したい。

## 2. 問題提起～前置詞がつくる文型とは

まず、前置詞がつくる文型をみる。前置詞は通常、以下の3つの文型をつくる。

文型A :  $NP_1 + \boxed{P + NP_2} + VP$  ( $NP_1$  : 動作主, P : 前置詞,  $NP_2$  : 対象, VP : 動作行為)

文型B :  $\boxed{P + NP_2} + NP_1 + VP$

文型C :  $NP_1 + V + \boxed{P + NP_2}$  ※ $\boxed{P + NP_2} = PP$

Aは前置詞構文として最も多くみられ、そして典型的な文型である。石毓智ら2001では前置詞は連動式の第一動詞の位置にくることが、前置詞になるステップであるとしている。そうならば、前置詞フレーズの後ろに動詞フレーズがあってこそ、それを前置詞と呼べるのではないか<sup>1)</sup>。

これまでの前置詞の先行研究は、前置詞がどのような格をとるか、文のどの位置にくるか、他の前置詞と置換可能かに重きを置くものが多く、後続の動詞にまでふれるものは少ない。前置詞はそもそも、前置詞フレーズのみで使うことは難しく、後続の動詞があってはじめて文がなりたつ。そこで、本稿ではこの文型Aを「典型的な前置詞構文」と呼びたい<sup>2)</sup>。前置詞はこのほか、前置詞フレーズを文頭におく文型Bがあり、また、文型Cをつくる前置詞もある<sup>3)</sup>。

文型Aはほとんどの前置詞が許容する。A, B, Cのすべてを許容するのは“在”のみである。A, Bを許すもの(“为”, “对”, “根据” etc)やA, C(“给”, “往”, “向” etc)を許すものもある。また、いわゆる“框式介词”になって、Bを許容するものもある。このように前置詞の中でもそれぞれ異なるのである。

文型Aでは、否定副詞や助動詞などの修飾成分は基本的に前置詞フレーズの前に置かれる。これは当該前置詞が、動詞性を保持していることの表れである<sup>4)</sup>。当然、より虚な用法をすればするほど、前置詞フレーズの前には修飾成分を置けなくなる。

実際、文頭にくる文型Bの場合、前置詞フレーズの前に修飾成分は置けない。この文型Bは典型的な前置詞用法よりもより虚な、新たな文法機能を獲得したと言えよう。

以下、“对”を例にその用法を5つの段階に分類し、それぞれの構文を検討し、“对”の機能分化、機能の広がりについてみていきたい。“对”に関しては、AとBが該当する文型である。したがって、今回は文型Cについては議論の対象としない。

## 3. “对” 文型分析

以下、“对”の動詞から前置詞へと移行する過程をみよう。“对”はかたちからは、動詞用法の“对着”, その内部が複雑な“对”, 最も動詞性が弱化した“对于”の3つに分けられる。



いているのを見た)

(1)は、向かいあうふたつ(二軒の家の門)が主語にきた例、(2)は目的語に向かいあう場所がくる例である。主体と対象(目的語)にくるものは、主に山や川のような場所やモノ対モノの関係のものが多い。ヒトが目的語としてきたとしても、物体としてとらえたヒトである。

例えば、(3)で対面関係にあるものは一見、ヒト対ヒトではあるが、互いの顔が向きあっていることがここでの必要条件ではない。ここで重要なのは、ある物体(後頭部)とある物体(わたし)が対面関係にあることであり、主体と対象(目的語)の間の意思疎通は存在しない。これらの文はみな“対”では非文であり、“对着”でなければ成立しない。

ところで、“对着”の解釈は先行研究や文法書・辞書によって異なるが、これを前置詞とする説も存在する。諸文法書による、“对着”の扱いを表1にまとめた。

表1 “对着”の扱い(中西2002から再作成)

書名	前置詞	動詞
1『現代汉语虚词』		○
2『現代汉语虚词词典』商务印书馆	○	
3『現代汉语虚词词典』北大出版社	○	
4『現代汉语虚词词典』上海辞书出版社		“对着”+L(場所)は動詞という説明有
5『現代汉语虚词词典』语文出版社	例文ともに記載なし	△
6『現代汉语八百词』		○
7『近代汉语语法研究』		○
8『实用现代汉语语法』		“对着”+Lは動詞という説明有
9『汉语口语语法』	○	
10『现代汉语介词研究』	○	
11『汉英虚词词典』	例文ともに記載なし	△
12『HSK 词语用法详解』		○
13『现代汉语虚词例释』	“对着”に関する記載なし、例文なし	
14『动词用法词典』	“对着”+Lはあるが、 “对着”+NP+VP+NP 例文なし	
15『应用汉语词典』	動詞の説明に“对着”+Lはあるが、動詞、前置詞ともに“对着”+N+VPの例文、説明なし	

表1から分かるように、前置詞“对”に「“着”をつけられる(可以加“着”)」とするものや、動詞“对”+“着”とするものもある。虚詞辞典で“对着”を挙げないものは動詞とみなしているともとれるが、何も言及がないものは、その判断は読み取れない(表1では△で表示)。

また、前置詞“对”に「“着”をつけられる」という解釈は、前置詞のルールからそれることもあり、説明が不十分であるし、他の前置詞に“着”をともなったものの説明と比較しても物足りない。

例えば、『現代汉语虚词词典（北京大学出版社）』では、前置詞“对”に対して「“着”をつけられる」としているが、“跟”では同じ注は見られず、“跟”の意味項目に「“跟着”の意」とするにとどまっている。また、“向”は“向（着）”とされ、この他に“着”についてふれることはないが、これとは別に前置詞“向着”を別に項目を立て、「向”に“着”をつけることで文を書面語化させる（筆者訳）」と注記している<sup>6)</sup>。前置詞によって、動詞からの変遷が異なるため、共通する説明でないことは納得できても、ひとつの前置詞に対して、ここまで解釈が異なるのは理解に苦しむ。

また、“对着”+場所の“对着”を動詞と記してあるものでも、後に動詞フレーズがくる場合にまで言及した書は少ない。

近年の研究では儲澤祥2004が“对着”についてふれている。そこでは、“对着”の扱いが曖昧なことを指摘し、“对着”は動詞“对”+“着”が虚化したもので、これを完全に介詞化していない介詞としている。

儲論文は“对着”の虚化の段階を対象が無生物か有生物かで三つに分類する。そして、筆者の言うL1を動詞とし、L2は前置詞で「動作の方向を示す」としている。儲論文でも空間性についてふれているが、強くこだわってはいない。

また、“对/对着”の違いを検討したものに万2008aがある。万論文は儲論文を受けて、「介詞“对着”」とし、『八百词』に“对着”の介詞用法についての言及がないと指摘する。しかし、それは呂氏が“对着”を介詞用法とする立場をとっていないからであり、出発点が異なる。

筆者は“对着”は、動詞“对”に持続を表すアスペクト辞“着”を伴ったものと考え。この動詞“对”の意味は、「同一空間における対面関係」を示すものであり、この対面関係の持続を表すために“着”を用いられているのである。儲論文が言う、「動作の方向」は副次的なものと考えたい。したがって、他の“为着”，“顺着”，“沿着”とは異なる。

例えば，“为着”は“着”を伴っていても、持続の意味はすでにない。また，“顺着”，“沿着”は“着”のない単独用法が現代中国語にはなく、これらは，“X着”で前置詞と認めてもよい<sup>7)</sup>。万論文は一貫して，“V着”そのものが虚化して、前置詞となったと主張する。筆者は“为着”，“顺着”，“沿着”については納得できるが，“对着”については賛成できない。

再び，“对着”に戻ろう。筆者は“对着”は“对”が動詞から前置詞へ向かう過程で，“对”だけでは「同一空間における対面関係」をあらわしにくくなり，“着”が動詞性維持のmarkerとなり，“对着”となったものと考え。つまり，“对”のみではすでに前置詞としての性格が強く、「同一空間における対面関係」をあらわしづらく，“对着”となっ

て動詞としての面を浮き立たせようとしているわけである。

これに似たものに、“跟”がある。“跟”は“跟上（後ろにくっつく）”や“跟上来（ついてくる）”のように補語を伴えることや“你跟我来。（わたしについて来て。）”のように“跟”自体に明らかな動詞用法がある。このことは、“对”よりもまだ動詞としての機能を残していると言えよう。しかし、“跟”は目的語だけをとる場合，“我跟着你（あなたについていく）”のように“着”を必要とする。これは“对着”が“着”を必要とするのと同じく“着”をつけることで“跟”の動詞用法を保証しているのである。

筆者の結論は、“对着”の“着”は、前置詞の接辞ではなく、“对”の動詞性維持のための“着”であり、動詞+“着”の“对着”が虚化して前置詞となったのものとは考えない。これについては次節でくわしく検討する。

### 3.2 L2 NP<sub>1</sub>+“对着”+NP<sub>2</sub>+VP+NP<sub>3</sub>

L2はL1の後に動詞句が付加されたもので、連動式を形成する。

- (4) 对着大山深深地吸一口气,……『老』(大きな山に向かって、深々と深呼吸をした)
- (5) ……七八个人带着悲戚的面容, 对着那具尸体发愣。『废』(…、7、8人の人が悲壮な面持ちで、その死体に向かって呆然としていた)
- (6) 他们对着湖面呼喊:……『天』(彼らは湖面に向かって叫んだ)
- 
- (7) 我跑过去对着他的耳朵大喊:……『十』(私は走っていき、彼の耳に向かって叫んだ)
- (8) 他们对着他感激地笑。『寒』(彼らは彼に向かって、感謝のあまりほほえんだ)
- (9) ……大家装出惊奇和羡慕的脸色, 对着我看。『学』(…みなは驚きとまた一方うらやましそうな顔つきをして、私を見た)

NP<sub>2</sub>が場所や物体（無生物）の場合は、L1と同様、「同一空間における対面関係」がなければならない。そして、NP<sub>3</sub>がヒト（有生物）の場合、対象は物体としてのヒトではなく、NP<sub>2</sub>の意思表示の対象に移行している。ただ、ここでは意思表示がNP<sub>3</sub>に伝わっているかは問題ではなく、一方的なNP<sub>2</sub>の伝達行為だけが認められるだけである。また、後続の動詞フレーズは[-状態性]で、体の一部分で行う、動きの静かなものに限られる。

これらの文の中で“对着”が伝えるものは、主体と対象が「同一空間において対面関係」にあることである。

このうちL2のみで見られる、(4)~(6)のような文は“对着”でなければ成立不可能である。これは、“对着”にして、主体と対象が「同一空間における対面関係」にあることに強調しているのである。そして、後続の動詞は極めて動きの静かなものに限られてくる。

一方、(7)以下、対象がヒトで、動詞が伝達動詞や視覚動詞、それに体の一部分で行う動作はL3に引き継がれていく。

L2は石2002が言うように“对”が前置詞に転化する一つのステップとも言えるだろう。

### 3.3 L3 NP<sub>1</sub>+“对”+NP<sub>2</sub>+VP+NP<sub>3</sub>またはNP<sub>1</sub>+“对”+NP<sub>2</sub>+Adj

L3は、L2より“对”の動作性が薄れ、「同一空間における対面関係」を必要条件としなくなっていく。ここでも後続の動詞フレーズは動作性の弱い、比較的静かな動作に限られる。これは、“对”構文の動詞フレーズの特徴ともいえる。ちなみに、動詞フレーズが結果を伴う場合は、“把”がその役を担う<sup>8)</sup>。

前述のとおり、L3の述詞は[-状態性]と[+状態性]に分類される。[-状態性]の述詞は動きの静かな、身体の一部で行う動詞や発話動詞、形式動詞である。[+状態性]はより抽象的な、態度感情を表す動詞や形容詞、認識を表す動詞である。以下、順にみていこう。

#### 3.3.1 動きの静かな動詞グループ [-状態性]

L3の中でも述詞が[-状態性]になるものに以下の3つに分けられる。

##### 1-①身体の一部で行う動作：笑,看,摇头,点头,鞠躬,摇手,招手,龇牙,使眼色…

以下の例は、“对着”ではないが、これらの動作は、動詞の語彙的性格からいって、「同一空間における対面関係」が約束されていなければならない。対象が無生物の場合は、L2と同じく、物体との対面関係ととれるが、ヒトの場合は、単なる物理的な対面関係よりも、一歩すすんで動作行為による何らかの意思伝達の対象となっている。これらは、L2から引き継がれている、体の一部で行われる動作である。

(10) 常觉你站在我低垂的雪帐外, 哀哀地对月光而叹息! 『暮』(いつも君が、私が低く下げた帳の外に立ち、悲しそうに月光に向かい、嘆息していることに気付いていた)

(11) 章明清对她摇手。『悲』(章明清は彼女に向かって手を振った)

(12) 我对她点点头, 她也对我点点头。『还』(私は彼女に向かってうなずき、彼女も私に向かってうなずいた)

(10)は対象が無生物の例で、「同一空間における対面関係」は、動詞が求める必要条件である。(11)、(12)の動作も主体が対象と「同一空間において対面関係」でなければ文が成立しない。L2では“对着”によって、主体と対象が「同一空間における対面関係」であることを強調していたが、L3の場合は、後続の動詞が、「同一空間における対面関係」を保証している。

ただ、“着”を伴わない点から言えば、“对”が絶対的に「同一空間における対面関係」であることを保証することよりも、意思伝達の対象を引き出す機能に移行している。これは次の1-②伝達動詞につながっていく。

1-②伝達動詞: 说, 解释, 汇报, 发表, 要求, 起誓, 喊, 提出(+NP), 表示(+NP), 保密, 隐瞒…

→ “对” 目的語 (対象) がヒトの場合: L3

→ “对” 目的語 (対象) が事柄の場合: L4

伝達動詞がくる場合は, 上に示したとおり, 目的語がヒトの場合とコト的なもの場合がある。目的語がヒトの場合にあらわれる伝達動詞は, 主体から発話の対象への単方向的なものである。

目的語がコト的なもの場合, “对” は“对于”にも置き換え可能となり, より虚なL4へ移行している。ただし, L4についてはここではふれずに, 対象にヒトであるL3についてのみ述べる。

また, “保密”, “隐瞒”等も伝達動詞の類に入れた。これらの動作はちょうど, “说”の反対の“不说”につながる動作とみなせるからである(以下“不说”類動詞とする)<sup>9)</sup>。以下, 例文とともにみていこう。

(13) 有什么想法, 对大家说吧。(马真1988より引用)(何か考えがあれば, みんなに言ってください)

(14) 你对老王解释一下这件事情。(王さんにこのことについて説明して下さい)

L3で, かつ伝達動詞がくると, 主体と対象が「同一空間において対面関係にある」という側面が薄れてくる。上のふたつの例で言えば, 対面関係にあると考えてもいいが, 同一空間に存在しない場合も十分に考えられる。

次の例は, 「同一空間において対面関係」にないが“对~说”が成立している。

(15) 优优在电话里对我说道:『平』(優優は電話で私に言った…)

\* 优优在电话里对着我说道:

この例は主体と対象が「同一空間における対面関係」にないため, “对着”に置き換えられない。つまり, この“对”は, すでに物理的に「同一空間における対面関係」を成立させることができなくなり, 単に発話の対象を引き出す機能として用いられていると言える。“对”の動詞性の弱化は, このあたりから始まるわけである。

そして, 対面関係をつくる機能がうすれると同時に“对”は, 他のものではなくその目的語に対してという焦点化の機能をもったと考えていいだろう。

また, 以下の“不说”類の動詞についても, 「同一空間における対面関係」の条件を満たさなくても文は成立する。

(16) 另一种是她的经历已经不需要对人隐瞒。『绝』(もう一つは, 彼女の経歴はもう人に隠す必要がなくなったということだ)

(17) 这件事不能再对他保密了。『白』(この件はこれ以上彼に黙ってはいられない)

1-③形式動詞（进行, 加以, 给予, 做, 作出, 实施 etc）+NP, “負責任”類（負/責, 承擔/責任）

→対象がヒトや具体的事物の場合：L3

→対象が事柄の場合：L4

上の1-①, 1-②で「同一空間における対面関係」がなくなり、意思伝達の対象を引き出す機能へと移行する過程をみた。この類では施しの対象として移行する過程をみよう。また、固定したかたちの“負/責任”類も具体的な動作ではないのでこの類に入れた。ここでもNP<sub>2</sub>の語彙の意味により、L3とL4に分かれるが、ここでもL3についてのみ述べる。

- (18) 仿佛是我在对她进行一次“口述实录”，……『回』（あたかも私は彼女に口述記録を取っているようだった…）
- (19) 国务院司法行政部门依照本法对律师，律师事务所和律师协会进行监督，指导。『法』（国务院司法行政部门是本法法律に則って、弁護士、弁護士事務所、弁護士協会に対して、監督、指導をする。）
- (20) 她了解我的想法，从未想对我加以改变。『爱』（彼女は私の考えを知っているので、これまで私を変えようとは思ったことがない）
- (21) ……在孩子心脏停跳后我们又对血液做了一次化验，……『绝』（…子供の心臓が停止した後、私たちはまた血液を検査した…）
- (22) 她说我可以对她作个妇科检查。『在』（彼女は婦人科検査をしてもいいと言った）
- (23) 我也应该对他负责任。（私も彼に対して責任を負わなければならない）

(18)の動作自体は、伝達動詞的なものである。その他も抽象的な行為で、“对”は施しの対象を引き出す機能に移行している。このように“对”と相性のよい動詞は、[-状態性]とはいえ、動詞としては動作性が弱く、対象に変化を及ぼすことはない、静かなものである<sup>10)</sup>。

3.3.2 [+状態性]の述語

→対象がヒトや具体的事物の場合：L3

→対象が事柄の場合：L4

L3のもう一つの特徴である、述詞が[+状態性]をもつ類をみよう。この類の“对”目的語はヒトや具体的事物の場合とコト的なもの場合がある。コト的なものがくる場合は上述同様L4に属する。ここでは、L3に該当するものだけ検討する。

[+状態性]の類でも、意味的によりコアなどところにあるのは、ヒト対ヒトの関係からあらわれる、ヒトの態度、感情を表す形容詞である。したがって、“对于”には置き換えられない。

以下、何らかの心理描写を表す表現を4つに分類して述べる。また、これらの文の否定副詞は前置詞フレーズの前ではなく、動詞フレーズの前にくる。“对”がより虚な段階に進んでいると言える。

2-①態度・感情を表す形容詞：怀疑, 满意, 客气, 恭敬, 和蔼, 好, 热情, 冷淡, 认真, 严格…

(24) 他对我很好。(彼は私に対してとてもよくしてくれる)

(25) 我们的战士对敌人这样狠。『白』(我々の兵士は敵に対してこんなに手厳しい)

この類は主語が主体, “对”の目的語は対応の対象で, ヒト対ヒトの関係から生まれる, 心理活動や感情を表している。述詞にくる感情をあらわす形容詞は, 対象が一人称の場合は, 一人称自身の評価であるが, それ以外は, 主体自身の評価ではなく, 発話者の客観的な評価である。

2-②態度・感情を表す, 有, “有”類動詞【发生, 失去, 产生, 充满etc】了+NP, 感(到)+NP

(26) 他对我有兴趣。(彼は私に興味を持っている)

(27) 我对老张有一点意见。『八』(私は張さんに少し不満がある)

(28) 我忽然就对他产生了一种亲近感, 这在以前是没有过的。『回』(私は突然彼に対して親近感をもった。それは以前抱いたことがない気持ちだった)

この類は主語が感情の主体で, “对”の目的語がその後の感情をあらわす語を引き起こす要因となる対象である。この類の文は対象に対する主体の感情を表し, その感情の変化を“有”や“有”類動詞によって表している<sup>11)</sup>。

2-③態度・感情を表す心理活動動詞：注意, 关心, 信任, 尊敬, 尊重, 讨厌…

(29) 我们对你完全信任。『八』(私たちはあなたを完全に信頼しています)

(30) 在我的经验中, 他是世上第一个懒人, 因此我对他很注意: ……『记』(私の経験の中で, 彼はこの世で一番のなまけもので, だから私は彼を注意してみている)

この類は, 上述の2-②と同じく, 主語は主体で, “对”の目的語は心理活動を起こす対象である。これら心理活動動詞は, 本来動詞の直後に対象をとることができるが, “对”を介して対象を前に出して文を成立させた類である。対象を前置すると同時に, 述詞に副詞を付加したり, 状態補語にしたりして, 前置する条件をつくっている。

これらの例でも「とりわけNP<sub>2</sub>には」という焦点化が働いている。つまり, 対象を動詞の後におくかたちがunmarkedであるのに対し, 前置詞でもって引き出す場合はmarkedなのである。インフォマントによれば, これら“对”構文は突然使うことは難しく, 何らかの前提が必要とのことである。宋1996a:28でも「動作の対象を引き出し, 突出させることがその機能である(筆者訳)」としている。

2-④認識を表す動詞：理解, 了解, 知道, 谅解, 懂, 熟悉…

(31) 他对她知道得不多。(彼は彼女については良く知らない)

(32) 他对我们这些小知识分子十分熟悉。『虚』(彼は我々小知識分子をよく分知っている)

(33) 他正是那个人, 我对这张有一道疤的脸熟悉极了。『堂』(彼はまさにあの人が, 私はあの大きな傷のある顔をよく知っている)

この類も、2-③と同様、実際は対象を後ろにとることができる動詞が、“对”を介して対象を前置し、文を形成している。ここでも各動詞になんらかの副詞や補語がついていることに注意したい。

以上、“对”は「同一空間における対面関係」を求めなくなり、述詞が[-状態性]から[+状態性]に移り、否定副詞は動詞フレーズや形容詞の前におかれるようになった。同様の状況は、比較の対象を引き出す“跟”にもみられる。

(34) 我跟她不一样。(私は彼女とは同じではない)

この“跟”も「後につく」意味はなく、前置詞フレーズの前に副詞がこない点では、動詞性を失っていると言えよう。

ここまでは述詞が[-状態性]と[+状態性]のグループをみてきた。

以下では、[-状態性]の動詞がきても条件によって、[+状態性]に変化している例をみる。

### 3.3.3 [-状態性]の動詞がくる場合→[+状態性]への転化

“对”構文には述詞に動作性が強い動詞がくる場合もある。しかし、次の三つの条件によって、述詞を[-状態性]から[+状態性]に変えて文を成立させている。これらは“对”構文の枠組みが求めるものである。

条件：①否定副詞“不”を伴う ②状態補語を伴う ③助動詞を伴う

では、順にみていこう。

(35) 她干脆对我和弟弟彻底不管了。(彼女はあっさり私と弟を全くかまわなくなった)

(36) 他对我一点也不照顾。(彼は私に対してちっとも面倒を見てくれない)

これらの例は肯定形では成立しない。動詞フレーズの前に否定副詞が入り、述詞を[+状態性]し、“对”構文を成立させている<sup>12)</sup>。次のふたつの例も動作性の強い動詞だが状態補語を形成し、[+状態性]となったものである。

(37) 她对我照顾得很好。(彼女は私に対して世話をとてもよくしてくれる)

(38) 爸爸对我管得很严。『中』(父親は私に対して、とてもしつけが厳しい)

動詞“照顾”，“管”自体は動作性が強いが、状態補語を用いることで、“对”構文を成立させている。次の例は、助動詞をともなって、述詞を[+状態性]にした例である。

(39) 因为我很要面子，但现在我真的发现我对她可以用上爱这个字。『我』(プライドが高かったせいだが、今私は彼女に愛というこの言葉を使って良いのだと本当に気付いた)

(40) ……那为什么他对她可以收敛所有的感情而配合她呢？『只』(…じゃ、どうして彼は彼女に対して、すべての感情を押し殺して、彼女に合わせられるのですか)

上のふたつの例は“对”フレーズの後に助動詞をともない、述詞を[+状態性]にしている。これらも助動詞がないとすわりがわるく、“对”構文としては成立しにくい。

### 3.4 コト的なNP<sub>2</sub>をとるL3

また、L3には、次のようにコト的なものを目的語にとるが、“対”フレーズの前に修飾成分が入るものもこのグループに入る。これらは修飾成分がなければ、L4に入るが、これが原因で、“对着”、“对于”いずれにも置き換えられない。L3の中でもきわめてL4に近い、より虚な用法と言えよう。例えば、以下のような文である。

(41) 我们都对这个电影感兴趣。(私たちはみなこの映画に興味があります)

(42) 你应该对这个问题发表意见。(この問題について意見を述べなければならない)

すでに諸辞書や諸文法書でもふれられているが、上の例のように、“対”フレーズより前に副詞や助動詞を伴う場合は、“対”の目的語がたとえコト的なものでも、“对于”では非文となり、置きかえることはできない<sup>13)</sup>。この“対”の動詞性は、すでに薄れているが、前置詞フレーズの前に修飾成分がおかれる点では、動詞としての文法的機能を残していると言えよう。ただ、(41)で「興味がない」という場合、“不”は動詞の前にくる。このふたつの現象からも文法的機能の“半動半介”の状況がうかがえる。

そして、“对于”をつかうと前置詞フレーズの前にどんな修飾成分も置けなくなる。また、“对(于)”はコト的なものが目的語にきて、文頭におくこと(文型B)も許される。もっとも、文頭にもってこられる前置詞はそう多くない。文頭にくる“对/对于”については次節でよりくわしく検討する。

なお、すでに相原1989では述語VPが状態・状況を表す静態的なものはH不型【後の部分を否定、例]我对他不感兴趣。(わたしは彼に興味がありません)】、意志動作を表す動態的なものはQ不型【“对”を否定、例]我不对他讲事实。(わたしは彼に真実を言わない。)】であることを指摘し、述語VPがそれを左右するとあるがその他の具体例はあがっていない。

本稿の否定形について言えば、L3の[-状態性](3.1)までが「Q不型」で、3.2以降は「H不型」である。ただ、相原1989では述詞をH不型とQ不型と分けるだけにとどまっておき、同時に起きている前置詞の動詞性の虚実との関係にはふれていない。

### 3.5 L4 NP<sub>1</sub>+“对/对于”+NP<sub>2</sub>+VP+NP<sub>3</sub>またはNP<sub>1</sub>+“对/对于”+NP<sub>2</sub>+Adj

#### L5 “对/对于”+NP<sub>2</sub>+(NP<sub>1</sub>+)VP+NP<sub>3</sub>または“对/对于”+NP<sub>2</sub>+(NP<sub>1</sub>+)VP/Adj

ここからはL4(文型A)の“对/对于”とL5(文型B)の“对/对于”について述べる。いずれも、目的語にはコト的なものがきて、“对/对于”は互いに置き換えが可能である。

ただ、前節で述べたように、“对于”には“对”にない制約があり、“对于”は前にどんな修飾成分も置けない。この点では、“对”よりも“对于”の方がより虚な用法と言える。

また、L5になると前置詞フレーズが主語より前の文頭にきて、後続の動詞フレーズとの

距離が離れる。これは文型Aに比べて、より虚な用法である。

また、ここでもL3と同様、述詞によって[-状態性]と[+状態性]に分類できる。

### 3.5.1 [-状態性] のもの

この中にくる動詞はL3と同様、動作性の弱いものに限られ、次のふたつに分けられる。

(1)伝達動詞 (2)形式動詞+NP, “负责任”類の場合

伝達動詞の場合の前置詞の目的語はコト的なもので、ここでは話の内容(話題)である。

(43) 他对/对于自己的过失从不隐讳。『应』(彼は自分のミスをこれまで隠したことがない)

(44) 我们对/对于这个问题讨论了很长时间。(私たちはこの問題について長い間議論した)

(45) 对/对于这个问题, 他作了详细的解释。(宋1981より引用)(この問題について、彼は詳しい説明をした)

上の例から分かるように、コト的なものを引き出す“对/对于”の後続の動詞は伝達動詞で、対象(事柄)に変化を及ぼすことはない。(45)は行為動詞のあとの行為名詞が伝達動詞なのでこの中にいたが、次に述べる行為動詞+行為名詞は“对/对于”の文型で多くみられるものである。次は行為動詞を用いた例である。

(46) 分局对/对于她们这起命案进行调查, ……『绝』(分局は彼女らの殺人事件について調査を行い…)

(47) ……这本书对/对于美国的那个病例也做了记载, ……『绝』(…この本はアメリカのその病例についても記載をしており…)

(48) 律师可以设立合作律师事务所, 以该律师事务所的全部资产对/对于其债务承担责任。

『法』(弁護士は合同の法律事務所を設立することができるが、その法律事務所の全ての財産をもってその債務に対して責任を負う)

このように、コト的なものが目的語になり、行為動詞(特に“进行”) + 行為名詞の組み合わせをつくる頻度は高い<sup>14)</sup>。ここでの行為も対象に変化を及ぼすものではない。また、(48)のように、行為動詞や“负责任”類は、法律や条例の条文に頻出の表現である。

### 3.5.2 [+状態性] のもの

[+状態性]の場合も目的語がコト的なもので、L3と同様、態度・感情を表す形容詞や動詞を用い、述詞は以下の4つに分けられる。

これらの文の否定副詞はL3と同様、動詞フレーズや形容詞の前にくる。

(1) 態度・感情を表す形容詞の場合 (2) 態度・感情を表す動詞の場合

(3) 態度・感情を表す“有”類動詞+NP (4) 認識を表す動詞の場合

(49) 小李对/对于工作非常认真。(傅ら1997より引用)(李くんは仕事に対してとてもまじ

めである)

50) 我最近对/对于他的学习情况很担心。(私は最近彼の勉強面が心配です)

(49)は形容詞, (50)は動詞の例である。“对”で対象(事柄)を引き出し, 述詞には程度副詞がくる。程度副詞なしでは文は成立しない。以下(51), (52)は“有”類動詞の例である。

51) 他对/对于香港电影有一些看法。(彼は香港映画については, ある考えをもっている)

52) 我对/对于足球产生了兴趣, 但有了兴趣不一定就懂得了足球。『门』(私はサッカーに興味があったが, 興味をもったからといってサッカーが分かったわけではない)

上のふたつの例でも「他の映画/スポーツよりも香港映画/サッカーは」という焦点化の機能を有している。以下の例は認識を表す動詞の例だが, ここでも焦点化がはたらいっている。

53) 你问错人了, 对/对于这个地方, 我并不熟悉。『实』(あなたは聞く人を間違えている, ここについては私も知っているわけではありません)

54) 我对/对于这家公司的情况不太了解。(私はこの会社の状況についてあまり知らない)

### 3.5.3 [-状態性]の動詞がくる場合→[+状態性]への転化

[-状態性]から[+状態性]になる現象はL4と同様に存在する。

55) 我们对/对于祖国历史要好好学习。(わたしたちは祖国の歴史についてしっかり学ばなければならない)

56) 我公安人员对/对于案件的每一细节都调查得很详细。『实』(我々公安にたずさわる者は事件の細部にわたり, すべて詳しく調査をしている)

57) 当局对/对于这件事一点也不管。『家』(当局はこの件に関して少しも関与しない)

L4の“对于”と“对”は両者に本質的に違いはなく, 互いに置き換えは可能である。

それでもなお, “对于”が存在するのはどのような理由からであろうか。筆者は, “对于”には, “对”と区別する何らかの機能が存在すると考える。以下, その違いを考えてみたい。

## 3.6 “对于”と“对”の相違点

“对”と“对于”の置換可能性を考える場合, 後にくる名詞がヒトかコト的なものかというのが鍵となる。次の例について考えてみよう。袁毓林1995:39によれば, “对”がつくるフレーズの場合,

例) 对厂长的意见 (对厂长的/意见 or 对/厂长的意见)

の場合, “对厂长的/意见”と考え, 「工場長に対する意見」とするか, “对/厂长的意见”と考え, 「工場長の意見に対して」とするか, 二義的だが,

对于+ヒト+的+NP……→例) 对于厂长的意见 (对于/厂长的意见)

の場合は一義的で, 「工場長の意見に対して」にしかならないという。ここでは“对于”

のかかる範囲が、ヒトだけでなく、“的”以降の抽象名詞まで目的語にとる傾向がある。

一方、“对于”の目的語に代名詞を含むヒトのみの場合も文頭にくることもできる。この場合は、コンテキストによっては、“对(于)～来说”の意味になる。また、“对于～有+NP”となる場合も同様に“对(于)～来说”と同じ意味を表す。ただ、この文型に当てはまる“有”の目的語には損得、良し悪しに関する名詞がくる。

(58) 晨练对/对于身心健康很有益处。『对』(朝のトレーニングは心身の健康に有益である)

(59) 学习汉语对/对于我有好处。(中国語を学ぶことは私にとって利点がある)

框式介詞の“对(于)～来说”はこの枠に入るものはみなコト的にとらえ、「ある立場、側面、角度から言うと」となる<sup>15)</sup>。ただ、文型Bを形成可能である点から言えば、これもL5に入る。これらはともに文頭にくることで、前提を提示する機能、話題を提示する機能を獲得している。

### 3.7 L4 (文型A) とL5 (文型B) の異なる点, L5が獲得する機能

さて、L4からL5になることで、獲得した“对/对于”の機能とは何か考えてみたい。“对于”が目的語の射程をより長く取り、コト的なものを求める傾向があることは上でみた。そして、コト的なNP<sub>2</sub>をとると、文頭にくること(L5)も可能になる。

一方、L5になると前置詞の前に修飾語をとれなくなるが、文頭におかれることによって、いわゆる、とりたて(話題化)の機能も獲得したといえる。例えば、

(60) 对/对于这个问题,他作了详细的解释。(宋1981より引用)(この問題について、彼は詳しい説明をした)

(60) の“对/对于”には前述のとおり、焦点化の機能がある<sup>16)</sup>。また、文頭にくることによって「この問題については」ということが浮き立つ。つまり、話題化の機能を有したのである。このように文頭にくるかたちは他の前置詞でもみられる。例えば次の例である。

(61) 在北京有好几种专门给日本人看的杂志。『美』(北京には何種類もの日本人向け雑誌がある)

この“在”は動詞用法でもなければ、典型的な前置詞用法とも異なる。しかし、この位置でなければ成立しない。この“在”も文頭におかれる“对”と同じく、「北京では」という前提提示、話題提示の機能を獲得していると言えよう。

## 4. まとめ

以上、“对”の動詞用法から前置詞の中の機能を“对着”、“对”、“对于”の三つのかたちと前置詞の目的語の語彙的特徴や文法的位置からみた。図1は“对”の動詞から前置詞用法

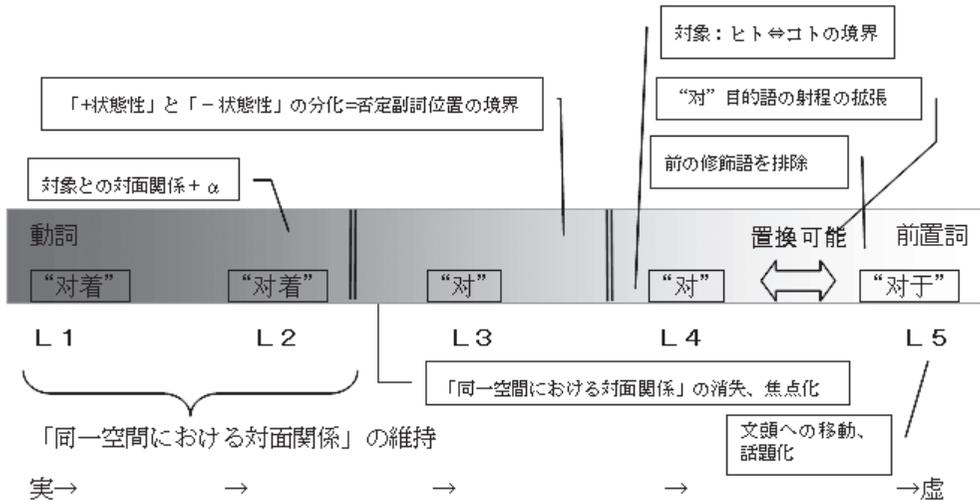


図1 “对”の機能獲得の変遷

に向かうL1～L5とそれに伴う機能分化を図解したものである。

動詞的用法から、動詞性が弱まって、“着”がとれた時点で前置詞となり、“半動半介（半動詞半前置詞）”の状態をへて、より虚な機能を獲得した。

また、目的語がヒト的なものからコト的なものになることによって、対面関係の対象を引き出す機能から何らかの意思伝達の対象、施しの対象を引きだす機能へと“对”の機能も変化していった。

そして、機能的には否定副詞や助動詞などの修飾成分が前置詞の前につくことができなくなり、最終的に前置詞フレーズは文頭にくることまでできるようになった。

現代中国語の前置詞の中でも“对/对于”は、動詞から前置詞までの実から虚に向かう、文法的にも、意味的にも動詞性弱化のグラデーションが興味深くでている例と言える。

他の前置詞と比較するならば、例えば“跟”は動詞から前置詞の用法は“对”と同様存在するが、文頭にくる文型Bまでは持たない。また、前置詞“把”の場合は「つかむ」という意味は薄れている。しかし、否定副詞は前置詞の前におくことが原則であることから考えれば、まだ動詞性を残している。このように同じ前置詞であっても、それぞれの機能は異なるのである。

以下の①～③に“对”の機能分化をまとめた。

①L1, L2までは目的語はヒトまたはモノ（物体）で、「同一空間における対面関係」であることを条件としているが、やがて、「同一空間における対面関係」を強くもとめなくなり、

対面の中での動作の対象として、ヒトまたはモノ（物体）を引き出す機能へ変化している。

②L3では、目的語はヒトやモノ、コト的なものまで広がる。“对”フレーズの後の動詞フレーズによって、“对”の機能も変化している。“对”の引き出すものも「同一空間における対面関係」の対象から伝達の対象、施しの対象と変化している。また、コト的なもので、修飾成分が“对”の前にくる場合はL3だが、L3の中でも一番虚な用法と言える。

③L4とL5は目的語にコト的なものがくる。L5の“对/对于”フレーズが文頭にくることによって、“对/对于”の目的語の焦点化、話題化が起きている。

このように、前置詞の機能分化は、動詞性の弱化の程度、文法的機能、文法的位置、後続の動詞フレーズの状態性によって、記述できるのではないか。

## 注

- 1) 同第21章参照。同論文は、連動式 $V_1OV_2O$ は、 $V_2$ が主要動詞で、 $V_1$ が副次的動詞になるが、 $V_1$ の位置にくる頻度があがると、動詞から文法化を経て、前置詞という一類が生まれるというもので、①前置詞としてもいいもの（把、被、以、自、于など）、②前置詞と動詞の中間にあるもの（比、跟、到、在など）、③ $V_1$ にきても頻度的には $V_2$ にくることが多く、動詞とみるのが妥当であるもの（看、说、去、陪など）の3つに分類している。
- 2) Li and Tompson 1983:285でも、第九章 動介詞・介詞の中で、同じ構文をあげている。{主語・主題} 動介詞+名詞片語 動詞(名詞片語) また、饶长溶 1989:175にも次动词(前置詞)をみる文型に、(主語)+次动词・宾+动/形をあげている。
- 3) 文型Cを前置詞フレーズとするかは再考の余地がある。宋 1996b:147でも前置詞の後の停頓や“了”を伴えることから疑問を呈している。但し、先行研究は前置詞フレーズが補語となったとするものが多い。
- 4) 张斌 2000:88でも副詞や助動詞の修飾を受けることを介詞が実詞性を残す証拠としている。
- 5) 中西 2002, 同 2004では“对”がL4で“对于”がL5としていた。しかし、思考を重ねた結果、“对/对于”の違いで修飾成分を置けないなどの理由から機能語化が進んでいると考えた。また、文中での位置も文頭に置くほうがより機能性が高いと考え、この分類にした。
- 6) 许维翰・郑懿德 1982『现代汉语常用词语例解』:460にも同様「书面語の中で“向”に“着”をつけることがある(筆者訳)」という説明がある。ただ、この説明がすべての虚詞辞書にあるわけではなく、『现代汉语虚词词典(北京大学出版社)』:455のように、「“着”をとまうことができる(筆者訳)」という説明だけにとどまっているものもある。
- 7) 現行辞書では“沿着”“顺着”“为着”は見出し語に収録している。“对着”を見出し語とする辞書はない。
- 8) 中西 2007で“对”構文と“把”構文の分業について述べた。前置詞フレーズの後続の動詞フレーズの動作性、結果性が強いもの、動詞フレーズがVRを形成すると“把”構文になるとした。
- 9) 中西 2005でも“跟”が発話動詞との結びつき、“不说”類との結びつきについて触れた。
- 10) 最近では動作性の強い動詞がくる文があるが、インフォマントの中にはこれを拒否し、次のように直

す人もいる。例)他对我做了一些不好的事。『绝』→他做了一些对我不好的事。

- 11) “有”類動詞の名称は、袁毓林1995によるもので、同P39に“发生”のような動詞を“有”に変化する動詞(“变成有” change to hold)とし、逆に“失去”のような動詞を“没有”に変化する動詞(“变成没有” change to not hold)とし、総じて“有”類動詞としている。
- 12) 宮田・李1992:69にも「謂語が一音節の動詞だけでは普通成立しない」という記述があり、何らかの修飾語を必要とする。
- 13) 例えば、『八百詞』:183にも、「对于”を助動詞、副詞の後ろに用いることはできない。」とある。
- 14) 刁2004:175に“进行”と結びつく介詞の統計があり、“把”：“对(于)”=58：786とある。
- 15) “对我来说”は“对于我来说”とも言え、これは単なるヒトではなく、内面的に切り取った「私」の一側面をから言えよという意味と考えられる。
- 16) 田中1972:49に、“对于这个问题，另有看法。”を例に「この問題に対しては、別の見方があるという言い方には、“外の問題には別の見方はないが”という言外の意味が含まれている。」という何かと区別するニュアンスがあるとふれている。

## 参考文献

- Li and Thompson1981 *Mandarin Chinese A Functional Reference Grammar*.Berkeley, CA. University of California Press
- 相原茂1989「介詞フレーズを含む文の否定」『お茶の水女子大学中国文学会報』第八号
- 中西千香2002「“对”の意味・機能と文法化（虚化）」『愛知論叢』73号:65-88頁
- 中西千香2004「“对”の動詞性弱化による意味・機能の変化について」修士論文（未刊行）
- 中西千香2005「“跟”の意味拡張について—結びつく動詞を通して」『中国語学』252号:210-228頁
- 中西千香2007「動詞における前置詞選択の契機—“对”と“把”を中心に」  
『中国語教育』第5号:70-84頁
- 田中清一郎1972『テーブル式中国語便覧』評論社
- 北京商務印書館、小学館2002『中日辞典（第2版）』小学館
- 儲澤祥2004「“对着”の虚化過程及其語法地位」《語言學論叢》第29輯:278-290頁北京:商務印書館
- 刁晏斌2004『現代漢語虛義動詞研究』大連:遼寧師範大學出版社
- 饒長溶1989「再說次動詞」『語法研究和探索5』:174-183頁語言出版社
- 石毓智・李納2001『漢語語法化的歷程—形態句法發展的動因和機制』第21章:375-391頁北京:北京出版社
- 宋玉柱1996a「“把”字句，“对”字句，“连”字句的比较研究」:21-59頁  
『現代漢語語法論集』北京:北京語言學院出版社
- 宋玉柱1996b「四，“介詞結構做補語”」:147-149頁『現代漢語語法論集』北京:北京語言學院出版社
- 万莹2008a「析介詞“順”，“顺着”」雲南師範大學學報2008年7月第6卷第4期
- 万莹2008b「析介詞“对”，“对着”」北京廣播大學學報2008年第2期(總第47期):48-51頁
- 袁毓林1995「現代漢語二價名詞研究」『現代漢語配價語法研究』:29-58頁北京:北京大學出版社
- 傅雨賢・周小兵・李貌・范干良・江志如1997『現代漢語介詞研究』廣州:中山大學出版社
- 侯學超1998『現代漢語虛詞詞典』北京:北京大學出版社

## 現代中国語“对”における機能分化について

- 黄南松 孙德金主编2000『HSK词语用法详解』北京:北京语言大学出版社  
马真1988『简明实用汉语语法』(修订本)北京:北京大学出版社  
孟琮·郑怀德·孟庆海·蔡文兰编1984『动词用法词典』上海:上海辞书出版社  
商务印书馆辞书研究中心编2000『应用汉语词典』北京:商务印书馆  
吕叔湘主编1999『现代汉语八百词』增订本北京:商务印书馆  
王还1992『汉英虚词词典』北京:华语教学出版社  
王自强1998『现代汉语虚词词典』上海:上海辞书出版社  
张敏2000『现代汉语虚词』上海:华东师范大学出版社  
张敏主编2001『现代汉语虚词词典』北京:商务印书馆

### 用例文献

用例は北京大学漢語語料庫の抽出結果、文学作品からの抽出例や作例で、すべてインフォマントチェックをうけている(北京在住女性40代、北京在住女性30代)。

『走』:辛北『走出迷惘』/『老』:陈一夫『老夫男娶少妻』/『废』:巴金『废园外』/『天』:汪曾祺『天鵝之死』/『十』:余华『十八岁出门远行』/『寒』:巴金『寒夜』/『学』:丰子恺『学画回忆』/『幕』:石评梅『暮畔哀歌』/『悲』:曾卓『悲歌』/『还』:郁达夫『还乡后记』/『平』:海岩『平淡生活』/『绝』:安顿『绝对隐私』/『回』:安顿『回家』/『法』:『中华人民共和国律师法』/『爱』:飞沙『爱在他乡』/『在』:余华『在细雨中呼喊』/『记』:老舍『记懒人』/『虚』:『现代汉语虚词词典』/『堂』:残雪『天堂里的对话』/『中』:『中国語文法概論』/『我』:宁采晨『我把自己的爱情推向了不归路』/『应』:『应用汉语词典』/『门』:铁凝『门外观球』/『八』:『现代汉语八百词』/『白』:『中国語辞典』2002白水社/『实』:『实用现代汉语语法』/『家』:巴金『家』/『对』:『对外汉语常用词语对比比例』2000北京语言文化大学出版社/『美』:荒川清秀『美紀の見たり聞いたり15章』白帝社

### 现代汉语“对”的功能分析

提要: 现代汉语中的介词大都由动词虚化而来。因其虚化过程的不同,介词所留存的功能也是多种多样的。

本文主要就“对”的功能分化进行考察分析。现代汉语中,“对”有动词用法,还有介词用法。介词用法中又有“半动半介”的。

笔者按照从动词用法到介词用法的虚化程度将“对”分成5个等级。虚化过程中,“对”的功能也在分化。很多工具书和先行研究将“对着”看成介词而这个介词尚未完全语法化的,本文先就此问题进行讨论,并提出疑问。再通过考察和“对”能搭配的动词,来了解“对”存在什么样的功能。最后对于放在句首的介词短语进行讨论。

关键词: 对 动词 介词 功能分化 语法位置